

令和6年度山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム

古墳時代中期の遺物集積祭祀を考える

資料集

山梨県埋蔵文化財センター

2025.3

開催にあたって

近年、山梨県内では、中央新幹線建設事業や新山梨環状道路建設事業に伴い、これまで遺跡の調査が少なかった地域においても埋蔵文化財の試掘調査・発掘調査が進んでいます。とくに甲府盆地の低地部では、河川の氾濫によって、地表下2m～5mの深いところから、遺跡が新たに見つかる事例が相次いでいます。このような発掘調査によって、山梨県の歴史がより鮮明になっていくことでしょう。

今回のシンポジウムの主役となるのは、令和元年度に笛吹市石和町の北畑南遺跡で検出された、土器などを大量に集めた祭祀遺構です。北畑南遺跡も新しく発見された遺跡であり、祭祀遺構は地表下約5mの深さに埋まっていました。同様の祭祀遺構は全国各地でも見つかっておりますが、あまり類例は多くないため、祭祀遺構の評価にあたっては、さらなる調査研究が必要となります。

シンポジウムでは、古墳時代中期を中心とした遺物を集積する遺構について、各地での成果などをご報告いただき、議論をより深めて、その課題や研究の方向性について考えていきたいと思います。

日 程

令和7年3月8日（土）

10：30～10：40 開会行事（あいさつ・趣旨説明）

10：40～12：00 基調講演 「祭祀の新解釈」 篠原祐一

12：00～13：00 昼休憩

13：00～13：40 報告①「長野県内の遺物集積祭祀遺跡」 櫻井秀雄

13：40～14：20 報告②「静岡県における古墳時代中期の遺物集積祭祀」 小泉祐紀

14：20～14：40 休憩

14：40～15：20 報告③「新潟県内の事例-六日町バイパス関連調査成果を中心に」 田中祐樹

15：20～16：00 報告④「山梨県における古墳時代中期の遺物集積祭祀」 熊谷晋祐

16：00～16：10 休憩

16：10～17：00 討論・質疑応答

会場：恩賜林記念館 大会議室（山梨県甲府市）

例 言

1. 本書は令和7年3月8日（土）に、山梨県恩賜林記念館で開催する令和6年度山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム「古墳時代中期の遺物集積祭祀を考える」の資料集である。
2. 本シンポジウムは、山梨県埋蔵文化財センターが主催する。
3. 本書は、各発表者が執筆した原稿を、山梨県埋蔵文化財センター調査研究課熊谷晋祐が編集したものである。

目 次

基調講演	「祭祀の新解釈」	篠原祐一	1
報告①	「長野県内の遺物集積祭祀遺跡」	櫻井秀雄	9
報告②	「静岡県における古墳時代中期の遺物集積祭祀」	小泉祐紀	13
報告③	「新潟県内の事例 - 六日町バイパス関連調査成果を中心に」	田中祐樹	17
報告④	「山梨県における古墳時代中期の遺物集積祭祀—北畑南遺跡を中心に—」	熊谷晋祐	21
付 録	中部～関東の遺物集積祭祀遺跡位置図		25

はじめに

考古学は、モノを証拠として最も合理的な解釈を行う物証史学である。人間社会を取り巻く環境には、モノ以外に数多の現象がある。つまりは天候、人間の感情、さらには内的要因の極みである信仰などである。信仰が儀礼として行動に移された場合、多くはその痕跡を残す。ここに祭祀考古学が存在する所以である。信仰に係る歴史的復元は、物証の分析の上に立脚して、その解釈のために現在まで継承されている信仰や文献など、多角的な検証が不可欠である。本論に於いては神社神道が該当する。専ら考古学では、祭祀に関する痕跡と認定する場合、非日常的な遺構状態と祭祀遺物と呼ばれるものの出土を以て判断している。しかし、何が行われて居たかには触れず、「祭祀」の言の葉のみで終えていることが多い。その真実や真理を追求する助として筆者は神職となった。現在進行形の祭祀に携わり神明奉仕に身を置くことで、合理的な解釈に厚みを持たせることが出来たが、祭祀考古学を学究する者が皆、神職にならなければならぬのであれば、学問的には行き詰まる。本論では、祭祀考古学的な研究方法も加味したうえで、主題である土器集積遺構の性格について論考するものである。これまで、当該遺構については、群馬県金井遺跡群を契機とするシンポジウムなどで縷々述べてきたが（篠原2017・2018）、ここに、最近増加した資料や、これまでの出土例も再考し、古代祭祀の一部を整理していくものである。

1 これまでの祭祀空間復元

(1) 上代文学による解釈

信仰の考察には、神道や神話を手がかりにせざるを得ない。この場合、記紀等の神話が記された奈良時代、その当時齋行され、伝承されていた祭祀から描き出したものが神話であることを念頭に置かねばならない。

古墳時代中期から後期にかけて、祭具として特徴的なものに石製祭具がある（篠原2025）。これまで、この石製祭具の使用方法を上代神話に求め、神籬祭祀の存在を想定してきた。神籬祭祀以外に、「日本書紀」に記される神代の祭祀行為場面は、伊弉諾尊・伊弉冉尊の太古があるが、太古を行ったとあるのみで祭具等の描写はない。そこで、今日知りえる奈良時代人が記した祭祀行為をみると第1表になる。

管見に触れたものを記したが、それぞれ違いがあるものの、共通点は、真榊を掘して、上枝と中枝には、八坂瓊の五百箇の御統の勾玉や八咫鏡（白銅鏡）、十握剣、青和幣・白和幣・木綿を取り懸け、祈禱することである。祈願祭祀と服属儀礼に用いられ、天津神・国津神共通の祭祀である。記紀は真物を用いているが、遺跡から宝器が奉齋品として確認されている例は少ない。これは、全国の鏡や剣の出土量から勘案しても、大王や各首長は祭祀齋行毎に真物を用いたのではなく、宗像沖ノ鳥のような特別な祭儀や儀礼にのみ、真物を使用したからであろう。

(2) 学史上の解釈

この榊に物実を懸ける儀式は、神籬と考えられてきた。現在でも地鎮祭などで、神の依代として用いられている儀式であり、神道考古学では、古代の祭祀空間の復元像と考えた。それは、石製祭具が、連鎖状態若しくは限られた範囲に集中し出



第1図 神社神道の神籬と記紀の五百箇の眞榊樹想像図

神社神道の神籬は、現在、地鎮祭などの屋外祭祀に用いられる舗設。

記紀の五百箇の眞榊樹想像図は、榊の上枝に石製祭具の剣形、中枝に石製祭具の鏡形、下枝に子持勾玉を垂懸したものを想定した。

第1表 奈良時代人が記した祭祀行為一覧

番号	記事	内容
1	古事記 天の理押野	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
2	日本書紀 第一巻 神代上 第七段本文	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
3	日本書紀 第一巻 神代上 第七段一書第二	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
4	日本書紀 德行天皇 第二十卷	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
5	日本書紀 神代天皇 第三卷	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
6	筑前國志記 卷之六 土土部	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
7	万葉集 (329)	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
8	万葉集 (34)	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
9	万葉集 (320)	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、
10	万葉集 (2007)	天の命の御言の御事御事を奉じてここに遊ばし、上社は天の命の御言の御事御事を取り置きて、中社は天の命を取り置きて、下社は天の命を取り置きて、

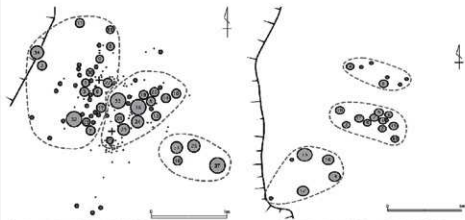
土するからである。これを、石製祭具が垂下状態で使用され、その後、纏まって落下、又は有機物製垂下連結物（紐）の腐敗で周囲に落下、若しくは垂下するために連結する基軸となるものとともに倒壊したものと考察した。垂下するために連結する基軸となるものを榭を准るのであれば、有機物で痕跡を残さない。そのため、神籬の存在を確認することが祭祀を復元する作業として、筆者もこれまで検証を行ってきた。一部を紹介する（篠原 2005）。

遺物の組み合わせと共に重要である神饌献儀の配膳について考えてみたい。提示した資料の中で、三和工業団地Ⅰ遺跡の祭祀遺構と、貝元遺跡4号・6号土坑の出土状況は、撤搬を行わず元位置を保っているものと考えられる。そこで、三和工業団地Ⅰ遺跡は報告書の遺物分布図から、貝元遺跡4号・6号土坑は出土状況図から、各土器の最大径を考慮した祭具の配膳位置を復元した。

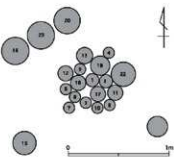
三和工業団地Ⅰ遺跡は、一括性のある土器群から一回性の祭具使用が想定できる。鉢2口を中央に据え、周りに小型の甕と土付甕、その外縁に器台と高杯を巡らせ、やや離れて大型の甕を3口直線的に並べ、南には壺を1口置いた配置が看守できる。

貝元遺跡4号土坑は、白玉が散在する中心空白部と土師器杯・手捏土器を配する一群、須恵器高杯の周囲に土師器杯を配する一群、須恵器壺の周囲に土師器杯・甕を配する一群の3群が看取でき、いずれも基本の組み合わせと捉えられる土器の共通器種はない。

貝元遺跡6号土坑は、土師器甕・高杯・手捏土器の一群、土師器杯・小型甕・手捏土器・土製模造品高杯形の



第2図 貝元遺跡4号土坑遺構（+が神籬推定位置）



第4図 三和工業団地Ⅰ遺跡復元図

第3図 貝元遺跡6号土坑遺構

一群（坏内に手捏土器を入れ子）、土師器坏・手捏土器を配する一群の3群に分けられ、これもまた基本の組み合わせと捉えられる土器の共通器種はない。

このように、前期の遺物構成は、鉢や小型甕などの小型容器を中心に、器台・高坏などの供膳器、それとは別に大型の甕・壺の容器が並置される配膳が見られることから、適量の液体が入る容器が中心にあり、祭祀の対象が小容器にあることを意味する。中期になると、土器などの神饌応応の祭具の他に、木製・石製の形代が祭具として多用されはじめる。特に石製祭具は、樹枝に執り懸けるものであることから、その位置に降神のための依代があったと考えられる。

近年、この神籬祭祀の存在への疑義が提示された(笹生 2016)。奈良時代の例ではあるが、第1表の万葉集(443)には、斎瓮を据えた前で枝に木綿や和栲を取り付けた榊を、それぞれの手に持って天地の神に祈る様子や、万葉集(379)の榊の枝にシラカヤ木綿を取り付け、斎瓮を据えて竹玉を連鎖したものを下げ、神事の装束をまとった女性が祈る様子が描写されている。古墳時代でも甕が据えられた祭祀が行われている。奈良時代の様子がそのまま当てはめられるとは限らないが、類似した祭祀が展開されていたことであろう。つまり、榊の枝に物実を取り付けるが、神籬として刺し立てるものとは限らず、寧ろ中心は甕で、斎主が手に持つものが榊である。このように、これまでの神籬祭祀については検討が必要で、先入観を持たず考古学的な検証をやる必要性が増してきた。

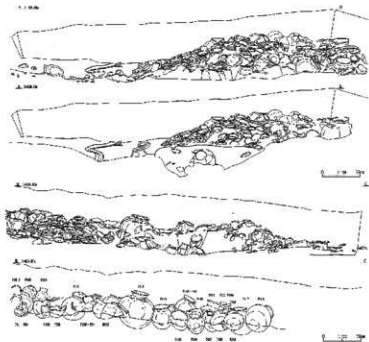
2 大量の土器の集積が認められた遺跡2例

(1) 金井東裏遺跡(杉山ほか 2019)

当該遺跡は群馬県渋川市に所在する古墳時代の榛名山二ツ岳火山噴火による火山灰で埋没し、当時の生活が封じ込められた金井遺跡群の一つである。6世紀初頭の榛名山二ツ岳の最初の噴火は、マグマ水蒸気爆発による泥雨の降下、火砕サージ、火砕流の流下など、榛名山二ツ岳テフラ(Hr-FA)は短期間に15回の噴火を繰り返し、30cmの厚さで堆積する。その後、6世紀前半の榛名山二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)は2m堆積し、地域は埋没した。テフラを除くと各火山灰降下直前まで機能していた地表面が現れ、火山弾の飛来痕や、ヒト足跡・馬蹄跡、被災した人物や馬、竪穴建物、倒壊した建物部材、屋敷地、畠、建物、祭祀遺構などが確認された。土器集積を考えるに着目されるのは3号祭祀遺構である。集落北側のムラの境界にあたる位置に推測される当該遺構は、復元直径5.4m、幅10～23cm、下幅3～10cmの周溝が円形に巡っている。入口は南東側にあるものと想定されて



第5図 金井東裏遺跡3号祭祀遺構全体図



第6図 金井東裏遺跡3号祭祀遺構遺物見透図

いる。遺構の内外にはS1・S2火山灰が降下しており、上屋が無かったことが分かる。円形周溝の溝部分には、S1・S2火山灰の降下が認められず、ここに囲い状の構築物があったことを示している。囲いの種類・高さなどは痕跡が無く不明である。

遺構構成は5群あり、①南にコの字形に開く大型土器群、②大型土器群の南の土中から出た埋納祭具群、③東南部に集中する700個に及ぶ小型集積土器群、④単独か数個単位での重ね置きの小型土器群、⑤囲いの外側に南北に一列に並ぶ一群である。小型土器群は、小型甕・埴・小型壺総数700個の土器を2～20段まで積み上げ、土器中には白玉が納められているものが半分ほどある。他の玉類や石製祭具・鉄器なども少数納められている。出土土器は、総数900点を超えるが、同県内の下芝天神遺跡2群集積遺構で約1300個体の土器が出土しており、多い方であるが特出する点までは言えない。土器の他には、小型鏡1、石製玉類86(勾玉15・管玉63・環玉1・垂飾1・平玉3・小玉1・土玉1・[耳飾1])、ガラス玉209、石製祭具158、白玉9918、鉄器183(鏝65、U字形銘鏝先2・曲刃鎌8・穂摘具30・袋斧2・刀子19・錐1・針1・釘1・鉄素材46・鍛冶滓他9)が出土した。土師器類には、「一切煮炊きした痕跡が認められず、水や酒などの奉納物を入れる入れものか、あるいは象徴的なものとして使用されたものを埋置された可能性が高い」と報告されている。

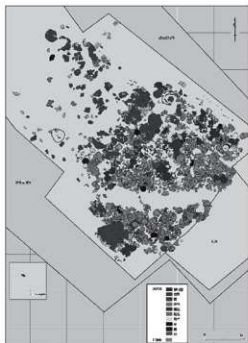
(2) 北大竹遺跡(渡辺ほか2022)

当該遺跡は、埼玉県行田市藤原町・若小玉に所在する。埼玉古墳群で「辛亥年」紀年銘金錯銘鉄剣を持つ稲荷山古墳が造営される頃、北大竹遺跡周辺で墳径20m以下の小型円墳が造営され、若小玉古墳群が形成される。その後、6世紀に70m級の複数の前方後円墳が築造、7世紀には、終末期古墳、八幡山古墳(直径約80mの円墳)と埼玉県で唯一、石室に線刻壁面が描かれている地蔵塚古墳(一辺約28mの方墳)が設けられるなど、北大竹遺跡は、埼玉古墳群に続く勢力圏の中に含まれた。発掘調査では、手持勾玉45枚出土したことも注目された(篠原2025)。遺物量の多い土器集積は第2号遺物集中である。調査区域外に延びる全容は不明だが、最大幅約7m、その内約5mの範囲に遺物が密集している。

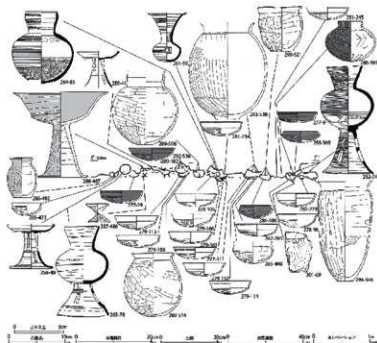
東西方向に延びる幅30cmの遺物量希薄部分があり、この両側に土師器が多く、北側に須恵器が多

第2表 出土遺物数一覧

土師器		須恵器	
坏	663	小型埴	1
内胴口縁坏	242	脚付小型埴	1
内筒口縁坏	142		
須恵器蓋模倣坏	279		
高坏	26	高坏	3
埴	9		
手捏土器	1		
罎	6	罎	5
小型壺	17	広口小壺	1
壺	33	直口壺	1
		小型壺	1
小型甕	57	小型甕	1
甕	27	甕	5
合計	839	合計	19



第7図 北大竹遺跡第2号遺物集中全体図



第8図 北大竹遺跡第2号遺物集中エレベーション図

い。土師器は坏が重なった状態での出土、蓋模倣坏を身模倣坏に被せて蓋として使用した状態で出土するなど、使用実態を示すような出土状況が確認された。他に長脚の大型高坏が多数出土している点も特徴の一つである。土器類の他には、子持勾玉 19、石製祭具 27 (勾玉形 2、剣形 9、有孔円板 16)、勾玉 3、管玉 3、ガラス小玉 4、白玉 765、金銅製品の単鳳環頭大刀 1、鞘金具 1、鉄地金銅張三葉文楕円形杏葉 1、鉄地金銅張の杏葉 1、鉄製品の鉄刀 3、倒卵形無窓鐔 1、鉦 2、刀子 6、鉄鎌 149、鐮先形品 1、鎌形品 2、鉦形品 126 が出土した。時期は 6 世紀中頃や 7 世紀代にかけてであるが、大多数は 6 世紀後半の時期に収まるとみられる。

3 土器集積遺構解題

(1) 祭祀の本質

祭祀は、神をまつり鎮めることである。その方法の概略は、①神饌を献じ、②願意を伝え、③歌舞音曲で慰撫し、④幣帛を捧げること、⑤神饌の撤下品の神人共食となる直会である。神社神道では、神に祈願する願主(参拝者)と祭祀を執行する祭主(神主)が存在する。願主は神に祈願し、その赤心として初穂や幣帛を捧げる。神職は中取り持ちの役割を負い、祈願内容を古語に置き換えた祝詞を神前で奏上し、願主の意を伝えるのである。それは、専任であれば神への礼法をわきまえ、祈願の是非も祈祷行為に左右されないようにするためとも解されている。古代では、願主が首長の場合、血縁の巫覡を祭主とした。しかし、願主が直接祭主の場合もあり、責任の所在を明確にする意図もあつたであろう。

祭祀自体には秘儀と、公開儀礼が存在する。秘儀は、祭祀そのものが秘儀である場合と、祭祀の中で核心部分だけが秘儀である場合がある。公開儀礼は、祭員や参列者の荣誉と、参列出来ない参加者の向上心を促し、祭祀に繋がる人心の紐帯としての役割を担った。

今日、神社では、祈願者が、神は願意を聞き届けて呉れる対象と考え祈禱する。しかし、本来、上代文学等を見ると神は祟るもので、鎮めるために祭祀を執り行っている。平時だからこそ、歳時的な農耕儀礼が出来るのである。当時の観念では、神こそが、絶対的に畏怖する存在なのである。

古い祝詞は「延喜式」にあるが、内容的に最古の例は飛鳥期まで遡る。従って、その原形は 6 世紀前半を視野に入れることが出来る。祝詞は、神を讃え、感謝し、海川山野から集めた神饌を供し、様々な布等を奉り、歌舞音曲で神を楽しませ、気分の良くなったところで、お願い事を申し上げる構成となっている。これは、神社祭式の基本構造と同じで、祭儀である祭式も核心は伝承されていると見て良い(篠原 2001)。祭式は、祭員が神前を浄め、①神饌を伝供で神前に献じ、②祝詞を奏上、③楽を奏し、④玉串を奉りて拝礼、⑤神饌を撤し、撤下の神酒を戴く直会となっている(篠原 2004)。これらのうち③は省略される場合もあるため、逆説的に省略されない場合は、最高の礼を尽くす正式な重要祭式と言える。つまり、献饌・祝詞奏上・幣帛奉奠・直会が重要要素であり、特に神を饗応し、神徳を称え神恩感謝することで鎮めが成立し、付加しての願意奏上が核になるのである。当然、神饌は神威の強さの認識と鎮めや願意の内容により、献じる量の規模が変わる。特に横山の如くと祝詞にあるように、多くの神饌で神を饗すことで大祭は成立する。このように神饌台数により大・中・小・雑などの祭が体系的では無いにしても区別されていた可能性は高い。神饌は神に献じる食事であるため、当然、召し上げられる状態での配膳がなされ、今日のような生のままの生饌ではなく、煮炊きた熟饌が主であった。つまり、祭員や参列者の規模と直会を受ける人数が比例し、供せられる神饌量も祭祀の規模により多くなる。しかし、全員に熟饌が回るとは限らないため、主たる参列者以外には神酒が配られ、神酒を注ぐ器も多く用いられたと考えられる。

(2) 祭祀の階層と内容

古代祭祀は 5 世紀までは集団祭祀が主であり、5 世紀末葉から家や個に係る分枝が派生した。謂わば公のみの祭祀から個の祭祀が認められもので、こうした状況は、今日、民俗学に見られる民間信仰の階層性に類似し、そ

第3表 出土遺物数一覧

土師器	須恵器
坏	446 蓋身 32
坏蓋	3 坏蓋 11
坏身	3 坏身 13
須恵器蓋模倣坏	440 蓋類 8
地	18
鉢	2 有蓋高坏 12 無蓋高坏 6
高坏	25 高坏 6 坏 5
壶	15 壶・鉢 6 脚付壶 21 横瓶 5
提瓶	1 提瓶・瓶類 7 小型甕 1
甕	52 甕 18
合計	559 合計 119

第4表 祭祀遺構等分類一覧

祭祀等の内容	祭祀等遺跡	遺構等	遺物出土量
1 自然物・人工物等の信仰対象	集落付近に存する自然対象物に臨み選定された祭祀跡	磐座となる巨岩・配石遺構 河川・瀧・湧水 山脈 樹木・社 磐座(配石)遺構 区画を持つ遺構 空地 祭具と土器を伴う遺構 甕となった甗等を伴う遺構 祭具と土器を伴う遺構 祭器遺物の出土する遺構	土器・祭具等少量 土器・祭具等少量 土器・祭具等少量 土器・祭具等少量 土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量
2 例祭・臨時祭など集団祭祀	集落内及び近接した集落外に設置された祭壇で執り行われる祭祀跡	祭具と土器を伴う遺構 祭器遺物の出土する遺構	土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量
3 小祭・雑祭(習俗的祭祀)など小規模祭祀	境界や辻(敷)で執り行われる祭祀跡 田・畠・山口で執り行われる祭祀跡 住居外占有地内で執り行われる祭祀跡 住居内で執り行われる祭祀跡	祭具と土器を伴う遺構 祭器遺物の出土する遺構 祭具と土器を伴う遺構 祭器遺物の出土する遺構 祭具と土器を伴う遺構 祭器遺物の出土する遺構	土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量 土器1-5 祭具等少量
4 祭器具撤下場所	河川運搬に係る祭祀関連跡 埋納に係る祭祀関連跡 埋納に係る祭祀関連跡 投納に係る祭祀関連跡	河川跡 祭具と土器を伴う土坑等の遺構 祭器遺物の出土する土坑等の遺構 氈地や岸地跡 土器集積遺構	土器・祭具等多量(大量) 土器・祭具等多量(大量) 土器・祭具等多量(大量) 土器・祭具等多量(大量)
5 準備・片付けを含む宴会場	宴宣場跡 宴宣場跡 饗調理場跡・宴宣場跡 饗調理場跡・宴宣場跡 饗調理場跡・宴宣場跡	空地 祭器遺物の出土する土坑等の遺構 焼土遺構 土坑内に祭具や甗等を内包する遺構 甕となった甗等を伴う遺構	土器・祭具等多量 土器・祭具等多量 土器・祭具等多量 土器・祭具等多量 土器・祭具等多量
6 聖俗の隔離もしくは隔離施設(遮蔽または囲繞区画施設、遮隔)	首長層が斎行する祭祀跡	囲繞区画遺構 居宅跡	土器・祭具等少量 土器・祭具等少量

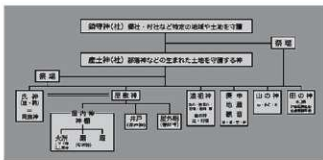
の粗形と言えよう(第9図)。

これまで、こうした祭祀儀礼の執行に用いられる空間構造や(篠原2003)、遺構を古墳時代の集落での祭祀跡と民俗例との比較検討から考えてきた(篠原2000・2001)。それらを具体的な遺構や遺物の出土量の目安として当て嵌めた試案が第4表である。

1は自然を畏怖することが信仰の基本にあることから、巨岩(磐座)や河川・瀧・湧水、神奈備型や浅間型の山嶽、神木や社の口など、それぞれを対象とした祭祀を想定できる。これらは、それぞれが臨める場所などからの遙拝や、その入口と認識する境界付近で行われるため、遺物は単独出土となる場合が多い。2は例祭・臨時祭などの集団祭祀で、内容により参列者の階層は異なるにしても、数名の代表者格が参集する祭儀であるため一定域の広さの祭場が必要となる。遺構としては区画施設や一度も堅穴式建物などの俗的な施設が設けられない空間地が想定され、神饌や祭具は撤下されるのが基本であるから、遺物の量は少ない。3は小規模な祭祀で、民俗的に言うと、第9図の第三階層に位置する。斎主(斎行者としての家長や個人)は日常的な延長の習俗的な祭祀で行う場合が多く、献饌する量は少ない。また、撤下もなく、次回まで供えたままである。4は祭器具の撤下場所で、河川跡、土坑、土器集積遺構などが該当する。撤下品の取納を伴う祭祀は、主に2の集団祭祀が該当するため、遺物量は大量若しくは多量となる。5は直会の饗宴場で、当該の場と付属する調理や廃棄に係る遺構が対象となる。6は囲繞区画施設での祭祀で、集落内では特別な位置づけである。聖俗で言えば、まつりごと(祭・政)に係るもので、首長層との関連が想定出来る。遮蔽されているため、遺物は中央よりも遮蔽している塀などの施設に寄る位置に片付けられていることが多い。

(3) 土器集積遺構

祭祀の核のひとつに、神饌を献じ神霊を慰撫することがある。つまり、祭場では熟饗が土器に盛られ、神酒が土器に注がれ献じられる。従って、土器が重ねた状態は献じた状態ではない。重ねた状態は、撤下し直会に供した祭器具をまとめて置いたものである(篠原2017・2018)。先の金井東東遺跡や北大竹遺跡の例でも、撤下品を取めるための動線や重ね置いた単位や順番が看取できる。現在の神社でも、カワラケ等を埋納する場所があ



第9図 小地域の民間信仰模式図(篠原2000)

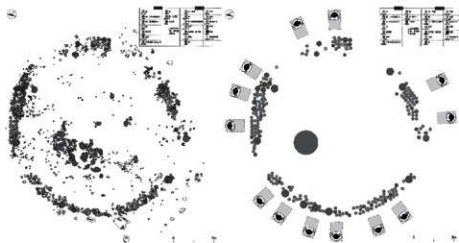
り、現代のカワラケ溜まりが形成されている。このように、特定の場所に収められることは容易に想像が可能である。其の際に気になることは、金井東夷遺跡を見る限り、土坑に埋納して日常生活では目に触れないようにするもの他、一応の遮蔽物を設けるか屋根は無い露天状態のものが土器集積遺構である。今日的観念では、神威に触れたものを重要視するからの直会^{ナカノミ}で有る以上、そうした品々を秘匿すると考える。しかし、現実には特別な施設を持っていない。そこで考えられることは、現代の神社の古礼納所などの施設である。ここは参拝者が自由に古い神札や護符、お守りなどを取めることが出来る。開放性が有るからと言って、生活廃棄物や有害物が加えられることはない。つまり、禁忌意識が働いている場所だからである。古代においては、神威への畏怖は現在の比ではなかったであろうから、秘匿していなくても禁忌の場所として認識されていたのであろう。

4 祭祀空間の復元

祭祀における献供品は撤下が基本であるが、撤下されていないと見られる例として、6世紀初頭から奈良時代までの5期にわたる「土器集積址」21箇所が確認され、環状に土器が配列される遺構が注目された青木下遺跡（長野県坂城町）がある（助川2007）。祭場の連続性については桜井秀雄の論考などがあるが（桜井2015）、ここでは、何故撤下されていないかの命題は別とし、素直に古代祭祀の一例として2つを考えていた。

まず、この環状に配される遺物の状況をどのように解釈するかである。筆者はこれまで、この状況を「饗飲酒礼」と見てきた（篠原2006）。しかし、環状の祭祀と考えたとき、これも又、これまでの観念に引きづられていたことがわかる。先の万葉集（379）・（443）は、齋瓮を据えた前で、櫛に物実を取り付けて折る様を描く。これは、甕の前で拝するものであるから、甕の前に空間地が想定できる。報文裏表紙に祭場の復元図が掲載され、須恵器大甕に相対した列拝を想定している。先にも述べた万葉集歌の時期に近接する時期であり、後の祭式を想定するところのような図となる。しかし、その場合は大甕の前面に神饌の舗設^{カマド}がなされるべきで、環状は意味をなさなくなる。従って、祭場を囲む坐を想定することが自然である。これまで、齋主が共同体の代表であり、齋主の後列に参列者は列拝すると考えてきた。しかし、それは神を人格神として認識している場合で、故に正面観、正中が存在する。つまりは、大陸的な影響で威儀を正した列拝が、仏教（蕃神）の仏像による人格神の認知されるのである。人格神以前、神霊体は常人には視認出来ない原子の集合体のような存在であり、様々なものに依り付き、自在に変化し、通常は小さく、時に大きく神威が増し、災いなどをもたらすと見ていたことは、古墳時代の小規模祭祀の祭具に小型祭器具があることなどからもわかる（篠原2005）。つまり、神霊の塊と認識していたのであれば、正面観はなく、無い故に、囲んで環状の座が舗設されると考えるのが自然ではなかろうか。中央では列拝が進み、律令祭祀的な形代祭祀に転換していくが（篠原2025）、地方ではこの祭式が導入されるのは、律令施行前段階に、祝が掌握され、神祇統制^{カミツケ}が行われるまで、地方では古来の祭式が遺っていたとも考えられる。

次に、祭祀の坐と神饌などの組み合わせ例の基本類型を抽出する。ここでは、環状に土器が配列される段階（第



第5表 出土遺物数一覧

土器		須恵器	
甕	4		
环身	10	环	186
高环	8	高环	29
罍	1		
短頸壺	7		
長頸壺	2		
甕	4		
平瓶	1		
横瓶	3		
提瓶	1		
小甕	4	甕・鉢	90
大甕	5		
合計	50	合計	305

第10図 青木下遺跡祭祀舗設復元図

4段階（7世紀前半）のUt 5号土器集積址を取り上げ検討したい。

大甕が北西に寄ること、その対面となる南東が環列中、空間を挟んで独立性が高いこと、坏が3段で小甕との組み合わせが明瞭であることから、ここを斎主の坐と考えたい。そうすると、坂城盆地と上田盆地を隔する陣場鳥越山や城の山などが連なる山塊を背にし、千曲川に向くことになる。この坐の西に1人分の座を想定したが、介添や副斎主の坐と見られる。補助的なこの坐を外すと、祭員と参列者は12人の構成が看守できる。一人分の神饌は、小甕と坏が主体であり、坏3段5列の右に小甕が配される例と、坏の段が2段から1段、5から3列と、参列者の格を想定させる差異がある。坐の復元では、坐に着いた場合、拜を想定し前面を空けた空間を設定し、およそ幅60cm、長さ100cmは、当時の体格から想定し必要と見られる。Ut 5号土器集積址から出土した須恵器は坏10・高坏8・甕9、土師器は坏186・高坏29・甕90で、参列者構成員には常に序列があることを前提に先の格差を均して計算すると、1人あたり凡そ坏16点（高坏3・甕8）の神饌具を抽出することが出来る。乱暴な感はあるが、本論ではひとつの指標として考えていく。この試数によって、何人規模の撤下品であるかとなり、村落内か広域かを判断し、祭祀の規模を考える助としたい。

試しにこの数値で金井裏東遺跡で計算すると坏41人以上、北大竹遺跡では坏28人以上の参列者が導き出される。金井裏東遺跡は、火山の災禍に対しての鎮撫を目的としたムラ全体や周辺集落合同規模の祭祀、北大竹遺跡は子持勾玉など出土品の内容により、広域を治める首長下で、古墳を作れる首長層が参集した祭祀の規模が想定出来るであろう。

おわりに

考古学的に見ると、神に神饌を献じることを理解しつつも、出土した遺物を中心に理論を組み立ててしまう性がある。しかし、食器を供えるのでは無く、食器に盛った神饌を献じるのが目的である。従って、食器が重ねられたまま神前に並ぶことはなく、重ねられた土器の集積状態は撤下したものである。水口や辻の祭祀状況を見る限り、土器に白玉が入ったものと、何も入っていないものが組みで出土する例が多く認められる。これらは小規模祭祀の祭場であり、祭祀の核は、神饌（有機物）と報賽品を組みで献じていた事が分かる。古代祭祀の復元に、神道をはじめとする関連諸学の援用は有用であるが、まずは、個々の事例の蓄積と分析で最も合理的な解釈をすべきである。近年の調査事例は、定説と思いついた概念を覆し、再構築する夜明け前なのかもしれない。

引用文献

- 桜井秀雄 2015「祭場の「固定化」と「清浄性」」『金沢大学考古学紀要』37 金沢大学文学部考古学研究室
笹生 衛 2016「神と死者の考古学」古代のまつりと信仰 吉川弘文館
藤原祐一 2000「石製模造品の諸問題」『信仰関連遺跡調査課程』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
藤原祐一 2001「祭祀考古学の基礎的研究再論」『研究紀要』第9号（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
藤原祐一 2003「杉沢Ⅲ遺跡」に見る律令初期「社」の存在について」『情報 祭祀考古』第24号 祭祀考古学会
藤原祐一 2004「律令神祇制における「社」検証のための一視点」『栃木県考古学会誌』第25集 栃木県考古学会
藤原祐一 2005「水辺の祭祀小考」『古代東国の考古学』大金宣亮氏追悼論文集刊行会 慶友社
藤原祐一 2006「須恵器大甕祭祀」『栃木県考古学会誌』第27集 栃木県考古学会
藤原祐一 2017「金井下新田遺跡の祭祀遺構について—神饌祭祀と献供品の撤下—」『金井下新田遺跡の謎にいとむ』平成29年度調査遺跡発表会資料 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
藤原祐一 2018「世界遺産宗像沖ノ島の石製祭具と祭祀」『日韓交渉の玉文化を考える』日本玉文化学会 2018年度釜山大会研究発表要旨 日本玉文化学会
藤原祐一 2025「子持勾玉考」『第32回特別展 かみつけの里博物館
杉山秀宏ほか 2019「金井東遺跡（古墳時代編）」公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652集
助川朋広 2007「南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ」坂城町教育委員会
渡邊理伊知ほか 2022「北大竹遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第477集

長野県内の遺物集積祭祀遺跡

櫻井秀雄（長野県立歴史館）

はじめに

長野県内の遺物集積祭祀の遺跡では、全国的にも早い時期の昭和41（1966）年に発見された駒沢新町遺跡を嚆矢に、高宮遺跡（松本市）や青木下遺跡（坂城町）などが注目されてきた。今回は、これらの遺跡を再検討することにより、長野県内での遺物集積祭祀について改めて考察していきたい。

1. 駒沢新町遺跡（長野市）

長野市北部の浅川扇状地末端に所在する。古墳時代中期4基の祭祀遺構が発見された（笹沢1982・図1）。1号址は基盤層を約40cm掘り下げた4.2×3.0mの長方形の土坑で、多量の完形土器と祭祀遺物が収められていた。出土土器はすべて土師器であり、総数は500個体以上に及ぶ。壺・甕などの大形品は遺構中央部に、高坏・小型丸底土器は周辺部にまとめて出土した。大形品の多くは口縁部を上にした正位の状態で出土したものが多く、土器の器種構成は、壺・甕類が100個体以上、小型丸底土器・埴が200個体弱、高坏100個体以上であり、その他には坏数個体、器台10数個体、ハソウ2点がみられたにすぎない。手捏土器は20数個体出土した。祭祀遺物では、白玉900点、石製模造品（剣形、有孔円板）、勾玉、ガラス小玉がある。鉄製品は鉄片10数点、鉄鎌1点、やりがんな1点などが出土した。

一方、2～4号址は掘り込みがない。2号址は完形土器を設置させたものとみられる。2か所の土器集中箇所がみられ、合わせて高坏39、壺・甕19、小型丸底土器・埴9、坏1、手捏土器6と白玉4、勾玉2、有孔円板3が出土した。4号址も2号址に似た構造・出土遺物をもつという。これに対して3号址は、500点以上の土器片を集積したマウンド状の遺構であることに相違がある。報告者の笹沢浩氏は3号址⇒1・4号址⇒2号址の順に構築されたとみている。駒沢新町遺跡では土器片の集積から完形土器の集積へと変化していたことがわかる。

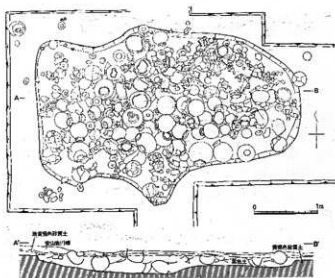


図1 駒沢新町遺跡1号址

2. 高宮遺跡（松本市）

松本市南部の高宮北に所在する。平成5年の調査で検出された遺構は住居跡3軒他、土器集中区15か所で検出された。いずれも5世紀中頃に位置づけられる（松本市教委1994・図2～4）。土器集中区は微高地上にあるもの（1号、11～15号）と幅20～30m、長さ60m以上をはかる自然流路内にみられるもの二種がある。流路内にみられるものは、斜面上の2・3・6号と流路底の5・10号、中洲の4号に分けられる。

このなかで最も規模が大きい土器集中地区が1号である。南北5m、東西8m程の範囲から400点以上の土器が出土した。それらは周囲の遺構検出面より高いところから出土しはじめ、中央部では高くなるような重なり様であり、掘り込みがなく平坦地へ集積した状況であったという。土師器の器種では図化された348点のうち、

高坏 129 点、小型丸底土器・埴 118 点、坏類 16 点、壺・甕類 80 点、その他 5 点（ハソウ 4、小型器台 1）であり、この他にミニチュア土器が 61 点みられた。小形品の構成比率は、高坏 48.1%、小型丸底土器・埴 44%、坏類 6.7% 等となる。この他、須恵器の直口壺片が 1 点出土している。壺・甕などの大型のものは分散して正位で胴部中位まで埋められた状態で出土したものが多く、高坏は脚部を押さえるように周囲に小型丸底土器・埴などがみられた。ミニチュア土器は土器群の外側に多く、逆位で出土したものが多く。

玉類では、勾玉 16 点（石製模造品含）、管玉 9 点、ガラス小玉 9 点、丸玉 1 点、算盤玉 4 点があり、白玉は 5300 点、石製模造品では剣形 9 点、有孔門板 4 点がみられる。他に土製鏡 1 点と土製勾玉 1 点鉄製品も出土している。注目できるのは鉄製品の多さであり、鉄鏃 52 点、刀子 15 点の他、鎌、鋤・鍬など総計 87 点が出土した。

他の土器集中については、1 号と同じ微高地上にみられた 11～15 号は小破片が多く、投棄したものと報告者はみる。流路内の 2～10 号については、破損品を投棄したものと完形品を集積したものの両者がある。2 号・3 号は流路北岸斜面の広い範囲に、連続して崩れ落ちるように完形や大破片の土器が集中していたという。一方、40 個体が円化された 6 号については、拳大の石 5 ケが平坦になるように放射状に置かれ、そこに高坏が正位に据えられており、その高坏の内部にはワラ状のものをドーナツ状に丸め丁寧に敷かれていたと報告されている。

他の流路内での土器集中は、4 号が 41 点、5 号が 54 点、7 号が 21 点、8 号が 11 点、9 号が 28 点、10 号が 38 点、それぞれ円化されている。微高地上の土器集中で円化された数は、11 号が 2 点、12 号が 6 点、13 号が 2 点、14 号が 10 点、15 号が 18 点であり、その規模は小さいものとなっている。すべての土器集中を合わせた割合では、高坏 54.7%、小形丸底土器・埴 33.1%、坏類 7.9% となる。

近接して 3 軒が検出された堅穴住居址も土器集中と同時期に比定されている。このうち焼失住居である 1 号住居址でも高坏 54.5%、小型丸底土器 36.4%、短頸壺 9.1% と同様な割合であり、坏は全くみられない。一般的な住居址とは趣きが異なる構成比率であり、土器集中の祭祀遺構との関係の上からも注目できる知見である。

3. 青木下遺跡（埴科郡坂城町）

埴科郡坂城町に所在する青木下遺跡は、環状に土器を配列するという特異な祭祀遺構が発見されたことで注目され

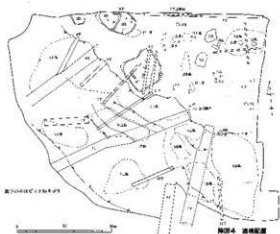


図2 高宮遺跡全体図

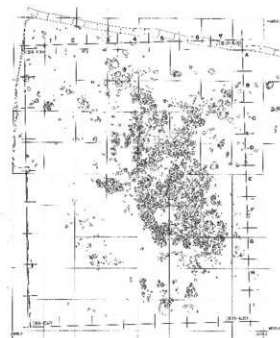


図3 高宮遺跡1号土器集中

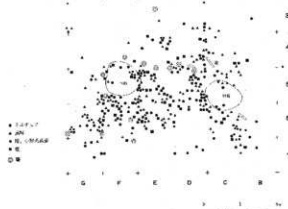


図4 高宮遺跡1号土器集中 土器出土模式図

てきた遺跡である（坂城町教委 2007・助川 2024 図5・6）。古墳時代後期の6世紀初頭から7世紀前半に位置づけられる土器集積址（「U t : ユニット」）の祭祀遺構が21基を数え、以下の3パターンに分類される。

- I 土器の出土が散在しているが、集積址を構成しているもの
- II 土器が小さな纏まり（ブロック状）を持ち、集積址となったもの
- III 土器が環状・弧状などのように大きな纏まりをもって集積址となったもの

報告者の助川明廣氏は、これらの祭祀遺構の変遷を5つの段階に分け、その代表的な遺構をあげている。

1段階（6世紀初頭～前半）：IIパターン（Ut7・28）、2段階（6世紀前半～後半）：IIパターン（Ut13）

3段階（6世紀後半～7世紀前半）：IIIパターン（Ut4）、4段階（7世紀前半）：IIIパターン（Ut5）

5段階（8世紀以降）：Iパターン（Ut1）

5段階のパターンIについては、土器集積址を覆っている砂層などから破片土器が多く出土していることから混入した土器群として理解されるため、IIパターン⇒IIIパターンという変遷が読み取れ、IIIパターンでも弧状から馬蹄状、そして環状への指向が感じられる。これらの祭祀遺構は約1500mの範囲に幾重にも積み重ねられていた。環状にめぐるUt5が最終段階となり、祭祀行為後に片づけ等がなされないままの状態とみられる。

Ut 5は、直径約8mの環状（正円形状）に坯を主体とした約330点の土器を並べられ、甕や壺、鉄製品などで構成されている。器種組成でみると土師器では坯47%、甕31%、甕9%、高坏7%、鉢4%などであり、須恵器では甕25%、坯18%、高坏・短頸壺15%、坯蓋8%、横瓶5%、平瓶・提瓶1%などとなる。その他にミニチュア・手捏土器5点、白玉139点があり、金属製品（鉄鏃、刀子、鋤など）の出土もみる。

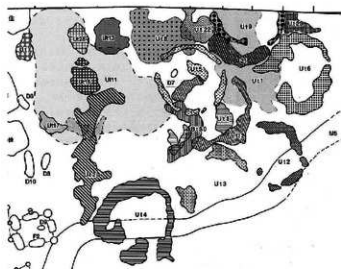


図5 青木下遺跡の土器集積址（Ut）の分布

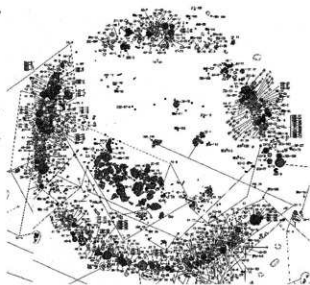


図6 青木下遺跡 Ut5

4. 課題と展望

(1) 土器集積遺構の変遷

駒沢町遺跡では土器破片の集積から完形土器の集積への変遷が読み取れる。掘り込んだ土坑内に集積されたのは1号址のみであり、他は平坦部に集積されたものである。

高宮遺跡の土器集中は、微高地と自然流路内に分けられるが、微高地上のは最大規模の土器集積遺構である1号を除くと、他の11～15号の5基は小破片が多く投棄されたものとみられる。自然流路内の2～10号については、破損品を投棄したものと完形品を集積したものの二者があると考えられている。

青木下遺跡は、6世紀初頭から7世紀前半までの土器集積遺構の変遷がたどれる稀有な祭祀遺跡である。ブロック状の小さな纏まりの土器集積から環状・馬蹄状・弧状の大きな纏まりの土器集積へと変遷していることがわかる。弧状から馬蹄状、そして環状を指向していることが特徴である。

弧状を呈する土器集積については、長野市の篠ノ井遺跡群 N-2 地点の土坑 SK58 での事例に注目したい。掘り込みの浅い約 3.8×2.5 m の長方形土坑の中央部に多数の白玉とともに 5 世紀代の土器群が緩い円弧を描くように列をなして検出された（長野市教委 2002・図 7）。土器群は 2～3 か所のまとまりとして把握できる。白玉 130 点は土器群を取り巻くように出土し、他には勾玉 2 点、管玉 2 点、土玉 1 点、甕玉 1 点、ガラス小玉 4 点、石製模造品（鏡形・勾玉形）2 点、不明鉄製品 1 点が検出された。土器は土師器の高坏と小型丸底土器を主体とし、これに壺・甕・埴が加わる。図化されているのは坏類 4 点、小型丸底土器・埴 20 点、高坏 16 点、壺・甕類 12 点である。この「円弧を描く」ような配列は、青木下遺跡の弧状や環状と共通する思考に基づく祭祀行為であったのかもしれない。

(2) 青木下遺跡についての論考

青木下遺跡については、調査から 29 年、報告書刊行からも 19 年がたち、いくつもの論考がみられている。主なものをあけてみる。

篠原祐一氏は U5 の土器列の内部の須恵器大甕に注目し、「郷飲酒礼」の可能性をみる（篠原 2006）。時枝務氏は弧状をなす土器集積のなかから単位—亜単位群—単位群という構造を見出す（時枝 2012）。筆者は 100 年以上祭場として使用されてきたことから「祭祀の場の固定化」を指摘し、また土器集積址で埋め尽くされたような出土状況から「祭場の清浄性」について論じた（櫻井 2015）。近年では鳥羽英継氏が U5 での土師器の特徴から地元の坂城地区及び南側の上田地区・真田地区という狭い範囲から祭祀に参集したのではないかと推測する（論考「青木下遺跡の参集範囲」は「千曲」へ投稿中とのことだが、ご厚意により紹介させていただく）。また、平林大樹氏は鉄鏝の分析を行い、平根式の大多数は遺跡の周辺地域で製作されたが、ナテ関三角式は静岡県域や関東地域などの近接地域が搬入元である可能性を指摘する（平林 2024）。今後も多方面からの研究が期待される。

主要参考文献

- 坂城町教育委員会 2007 『青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』
- 櫻井孝雄 2015 「祭場の「固定化」と「清浄性」」『金沢大学考古学紀要』37号
- 笹沼浩 1982 「駒沢新町遺跡」『長野県史考古資料編 主要遺跡（北・東信）』
- 篠原祐一 2006 「須恵器大甕祭祀」『季刊考古学』96号、藤山園
- 助川朋廣 2024 「青木下遺跡Ⅱ 日本で唯一、環状に土器が配列された状態で発見された祭祀遺跡」『地域文化』NO.149、八十二文化財団
- 時枝務 2012 「古墳時代における祭祀遺跡の単位と単位群」『立正史学』112号
- 長野市教育委員会 2002 『篠ノ井遺跡群（5）』
- 平林大樹 2024 「長野県青木下遺跡出土鉄鏝の再検討」『筑波大学史・考古学研究』第35号
- 松本市教育委員会 1994 『松本市高宮遺跡』

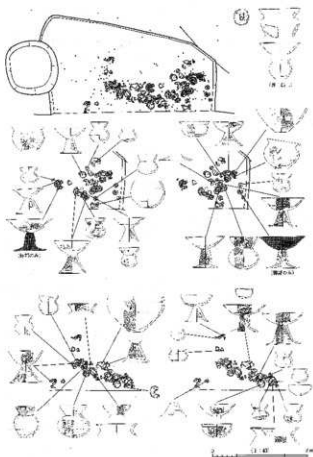


図7 篠ノ井遺跡群 土坑 SK58

静岡県における古墳時代中期の遺物集積祭祀

小泉祐紀（静岡市文化財課）

はじめに

先史・古代祭祀の研究史を概観すると、静岡県内の古墳時代遺跡はその発展に関わっている。戦前から戦後にかけて古代祭祀の研究を牽引した大場磐雄氏は、伊豆半島南部の下田市洗田遺跡をはじめとする発掘調査を基に祭祀遺跡の分析を進め、神道考古学の語を提唱した。また静岡県西部、浜松市山ノ花遺跡や磐田市明ヶ島5号墳下層出土の多様な祭祀遺物は、古代祭祀の姿を知る上で大きな手がかりを与えてくれた（笹生2016、2023）。洗田遺跡は、奈良県三輪山のような神奈備山（神が宿る）信仰の遺跡であり、山ノ花遺跡は水辺の祭祀に関わる。また、巨石が群在することで知られる浜松市天白磐座遺跡は、神が降りる磐座であるとともに、川の水源地に当たることから水に関わる祭祀の場と捉えられており、静岡県内には様々な特徴の遺跡がある。

2022年に静岡市曲金C遺跡で発掘調査が行われ、予期せず古墳時代中期の遺物集積遺構が見つかった。膨大な土師器のほか、5,222点の白玉が出土した。元々は遺跡の存在さえ認識されていなかったが、県内有数の遺物集積遺構として知られるようになった。ここでは、曲金C遺跡の概要を紹介するとともに、遺物集積遺構に焦点を当て、静岡県内の他の事例と若干の比較を行い、その特徴や課題について整理する。

1. 曲金C遺跡の遺物集積遺構

(1) 遺跡の概要

曲金C遺跡は、静岡平野の中央付近にある。小さな独立丘陵に挟まれており、そこへ流れ込んだ河川氾濫堆積物により形成された微高地の間の低地に位置している。発掘調査では、4時期の遺構面が見つかった。第1面は古墳時代中期～後期の水田、第2面は古墳時代中期の遺物集積遺構、第3面は古墳時代前期の古墳や井戸等、第4面は弥生時代後期の集落である。第1面の水田から出土した植物遺存体の放射性炭素年代測定（IntCal20 校正年代）では、5世紀半ば～6世紀半ばという年代が得られた。本遺跡は、大規模な遺物集積遺構が目ざされるが、平野部の土層堆積に伴う土地利用の変遷を知る上でも重要である。なお、第3面の古墳は、9.14 m ×（残存長）9.24 mの南北に長い方形で、木棺直葬と思われる主体部からは、2体分の歯と人骨の一部が発見された。

(2) 遺物集積遺構の特徴

調査区南端で見つかった古墳の高まりは、古墳時代中期まで残っていたため、第2面の遺物集積遺構が形成された頃とは、調査区南端及び北端が高く、調査区中央付近一帯は低湿地で、東に向かって傾斜する。遺物集積遺構は、こうした湿地の中でもやや高い所や傾斜面から3か所（SU1～3）が見つかった。各遺構の遺物の内訳は表1のとおりである。

遺物集積遺構の特徴を整理すると、まず①遺物の出土量が多い。SU1は644点、SU2は1,252点の土器が出土している。

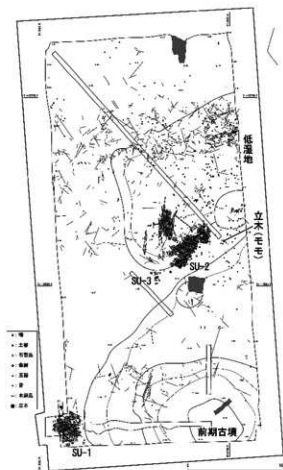


図1 曲金C遺跡全体図

遺構が形成された時期は、静清平野（静岡・清水平野の総称）の土師器編年（鈴木敏2012）中期Ⅲ様式（5世紀前葉）を主体としており、存続期間はそれ程長いとは思

表1 曲金C遺跡集積遺構遺物内訳

遺物	土師器										須恵器			滑石製模造品			F15	金属製品	石製	木製品				
	大型壺・甕	中型壺・甕	小型壺・甕	高坏	鉢・杯	手取	手取	手取	手取	手取	手取	須恵器	須恵器	須恵器	滑石製模造品	滑石製模造品					滑石製模造品			
例1	17	54	79	179	42	216	14	2	1	23	0	2	17	0	0	0	0	0	0	鉄鎚等				
点数						844					0		30						1,818		4	1		
例2	20	107	92	200	179	596	45	1	0	13	1	0	5	25	0	0	0	0	0	鉄鎚	銅幣			
点数						1,231					1		38						3,387		5	103		
例3	0	0	11	3	5	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
点数						22					0		0						17		0	0		

えない。このことから、一定の限られた期間に大きな祭祀行為があったか、あるいは土師の型式変化が見られない程度の短い期間に頻繁な祭祀行為による集積があった、などの可能性が考えられる。次に、②土師の器種構成は、土師器がほとんどであり、須恵器はSU2から出土した甕（TK216）が唯一で遺物集積遺構以外の包含層を含めても4点だけである。土師は手づくねが多く、SU1では土師器の38%、SU2では48%を占める。その他に高坏が多い。③大量の白玉が出土し、大半が散布されたと思われる。合計5,222点の白玉は、静岡県内で最も多い出土である。白玉は、SU1で1,818点のうち571点、SU2で3,387点のうち967点、総数の約3割が土師の中から出土し、1つの土器から30点以上見つかったものもあるが、ほとんどが1～5点程度の出土である。約7割の白玉は土師外からの出土で、散布された可能性が考えられる。④石製模造品は、SU1・SU2を合わせると、有孔円盤が多く、次に剣形が多い。剣形には、未成品も含まれる。⑤土師は、大型品を中心に配置している。一定量認められる大型壺及び甕は、ある程度間隔をもって立てて配置されており、その間を充填するように小型の手づくねや壺などが積み置かれている（図2）。土師はほとんどが完形であり、置かれた状態で集積行為が終了し、埋没したものと思われる。⑥鉄製品は鉄鎚が数点と少なく、遺構外からであるが察器として特殊化した炭手刀子（鈴木一2005）がある。⑦木製品には建築材がある。SU2から屏が出土し、遺構外からも屏と台輪と思われ

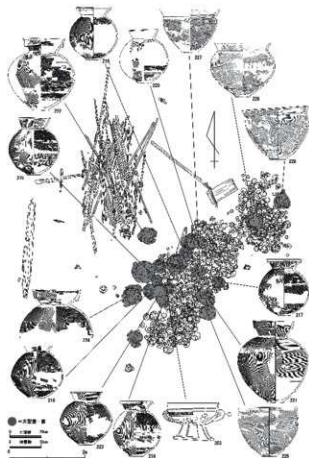


図2 曲金C遺跡 SU2大型壺、須恵器配置



図3 曲金C遺跡出土遺物

る建築材が出土しており、掘立柱建物または高床建物の材であったと考えられる。また、⑧SU2の東にモモの立ち木痕があり、調査区全体から約800点のモモの種実が出土している。付近に建物やモモの木のある景観であった可能性が考えられる。

静岡市域はこれまで、古墳時代中期の発掘調査例が少なく、当該時期の土器の様相は判然としなかった。近年は調査例が次第に増え、特に曲金C遺跡からの出土量は膨大だった。発見された遺構は、当該時期の大規模祭祀遺構の好例であるとともに、東駿河の土器を一定量含むなど土器様相を知る上でも重要な資料である。

2. 静岡県内の事例

笹生衛氏によれば、祭祀遺構は、立地から①河川や池沼といった水辺、②水陸交通の難所や要所、③集落内の祭祀の場、の大きく3つに分けられる(笹生2016)。また祭祀は⑦祭祀の準備、④祭祀、⑤祭祀後の対応、の段階があるため、単純に祭祀の場=祭祀遺跡(遺構)とは言えないと述べている(笹生2016・2023)。

静岡県内の遺物集積遺構の立地を見ると、曲金C遺跡や山ノ花遺跡のほか、静岡市川合遺跡、同市小里前遺跡、富士市沢東A遺跡、浜松市井通遺跡など、河川の脇、沼地やその周辺微高地など、水に関わる所が多い。ただし、小里前遺跡や沢東A遺跡などは集落が隣接する。焼津市宮之腰遺跡や藤枝市水守遺跡などは、集落内祭祀の場と思われる。伊豆半島南端周辺は、駿河湾と相模湾を往来する海上交通の要所に当たり、弥生・古墳時代など各時期の遺跡が存在し、外来系土器を伴うことも多い。この付近には、下田市三ヶ崎遺跡や夷子島遺跡など、岬の岩場にあり航海の安全を祈願したと思われる特殊な祭祀遺跡もある(鈴木一2010ほか)。遺物集積遺構では、南伊豆町日野遺跡や日誌遺跡、河津町姫宮遺跡から、古墳時代中期～後期を中心に集落内祭祀の遺物集積遺構が認められる。日野遺跡SC02は、小河川の河口部の湿地に位置し、立地上の①～③の各特徴を併せもつ。

いくつかの遺構を具体的にみると、川合遺跡12区SC12501や井通遺跡SX3201は、土器の量は100点前後以下、白玉は100点に満たない。川合遺跡は曲金C遺跡と同様に土器が置かれた状態であったが、器種構成は異なり坏や高坏が多い。小里前遺跡5次SX01は破片が多く、甕の羽口と約190点の被熱した礫が出土しているため、燃焼や土器の意図的な破壊がされた可能性がある。宮之腰遺跡は5世紀後葉(TK23・47)の4カ所の集積遺構が見つかり、うち3カ所が見つかった2009年調査MBJ地点SX01は、土器219点中須恵器が12点である。土師器は137点約63%が坏で、手づくねは2点しかない。坏は重ねて置かれたものが多い。甕を中心に坏で囲む行為は、曲金C遺跡と共通するように見える。大型壺には、意図的に破壊されたと思われるものがある。

南伊豆町日誌遺跡は、古墳時代中期～後期にかけて住居跡などとともに23カ所の遺物集積遺構が見つかった。中には焼絶住居の凹みを利用したものもある。5世紀前半～後半とされるB4は、復元された79個の土器のうち過半数を超える41個が高坏であり、甕・鉢約3割、壺約1割であった。ところが、5世紀末～6世紀初頭のC6・A4は高坏が少なく、手づくねが主体である。5世紀前～中葉のSC107では、甕が主体で手づくねが160点、白玉300点と多く、5世紀後半のSC603では石製模造品のほか白玉895点が出土している。同じ遺跡内でも、各

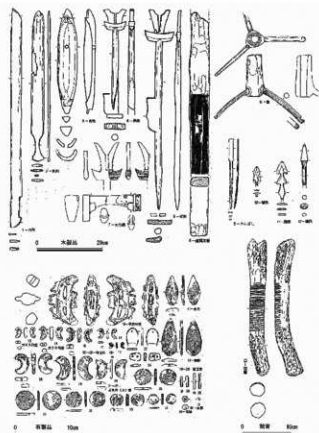


図4 山ノ花遺跡遺物(木製品・石製品・骨)(鈴木敏1998を改変)

遺構の遺物構成は異なる。なお、SC107は、60cm×2mの範囲に甕を主体に大型土師器が集中し、白玉の多くが60cm径の範囲に集中しており、報告書ではその場で祭祀が行われた可能性が指摘されている。

こうした遺物集積遺構の中でも、浜松市山ノ花遺跡は豊富な木製品が出土している点で注目される。同遺跡では、自然流路にある程度土が堆積してなだらかになった段階で、流路肩から底にかけて膨大な量の土器や木製品が見つかった。斜面の肩部に護岸とは関係ない矢板が打ち込まれていることから、外部と遮蔽する空間を作り祭祀が行われた可能性が指摘される(鈴木敏1998)。遺物は、1,100点以上の土器をはじめ2,500点以上の白玉、子持勾玉をはじめとする滑石製模造品などがある(図4)。特に注目されるのは、750点を超える木製品である。蓋(きぬがさ)、たたり状(儀仗様)、机(案)、刀鋒、杵、総かけなど紡織具(祭祀に使用する布関連)、琴、武器形、農具類などがある。そのほか鉄製品は刀身が1点、須恵器は5世紀前葉(TK73またはその直後)から後葉(TK23・47)に降るものがある。遺物は流路の南岸に多いが、北岸の土器群D群は、ほとんどが土師器高坏で、直口壺が2点のみという特異な構成である。山ノ花遺跡の多様な遺物は、充実した内容の祭祀を行うための道具一式を示すものと思われる。なお、山ノ花遺跡の木製品の武器・武具、農具、紡織具、楽器、器材といった構成は、磐田市明ヶ島5号墳下層の土製模造品のそれと似ている。山ノ花遺跡からは梯子材や椀材が出土しており、高床建物の材の可能性が考えられ、祭祀の場に高床建物があった可能性を示唆している(笹生2016)。このことは、曲金C遺跡でも同様の可能性が指摘でき、藤枝市水守遺跡は集落内から棟持柱建物が発見されている。山ノ花遺跡には、祭祀の場の可能性を示す遺構が見られたが、大量の遺物と建築材は祭祀後の対応(祭祀の場からの撤下)の可能性も考えられる。曲金C遺跡は、祭祀の場を示す構造物は発見されていないが、石製模造品の剣形未成品があり、建築材もあることから、祭祀の準備とともに祭祀後の場を示すのかもしれない。

まとめ

静岡県内に限ったことではないようであるが、遺物集積遺構を概観すると、集落に近い場合でも水辺の所が多い。土器の器種構成は遺構によって異なるが、数多くの白玉を中心とした石製模造品や土師器に、貴重な須恵器、鉄製品が少量含まれる。大型品を主として配置することが散見され、時に意図的な破壊や焼却を伴うこと、白玉を散布することが基本的な特徴として挙げられる。静岡県内では、100点前後の土器、1,000点未満の白玉をもつ遺物集積遺構は多く見られるが、数百点の土器、1,000点超の白玉をもつ集積遺構は限られる。極めて大規模な集積遺構である曲金C遺跡、多様な木製祭祀具を数多くもつ山ノ花遺跡、同じく多様な土製模造品をもつ明ヶ島5号墳下層も含め、それらは他の遺構とは一線を画す特別な遺構と言える。これらの祭祀遺構は、単一の集落または小規模な集団での施行とは思えず、祭祀を掌握し施行した有力豪族の存在が想像される。具体的な祭祀行為の復元とともに、祭祀を行う集団の範囲、さらには関連する古墳における祖先祭祀を含めた祭祀の実態に迫ることが、今後の課題である。

本稿をまとめるのに当たり、鈴木敏則氏、鈴木一有氏から御教示を得た。記して感謝申し上げます。

主要参考文献

- 笹生 2016 『神と死者の考古学』吉川弘文館
- 笹生 2023 『まつりと神々の古代』吉川弘文館
- 静岡県教育委員会 2024 『曲金C遺跡』
- 鈴木一有 2005 『兼手刀子の盛衰』『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
- 鈴木一有 2010 『古墳時代の東海における太平洋沿岸交流の隆盛』『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文化交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系
- 鈴木敏則 1998 『桓武山ノ花遺跡について』『浜松市博物館館報X』浜松市博物館
- 鈴木敏則 2012 『静岡県下タ村遺跡出土の韓式土器』『韓式土器研究XⅡ』

新潟県内の事例 - 六日町バイパス関連調査成果を中心に

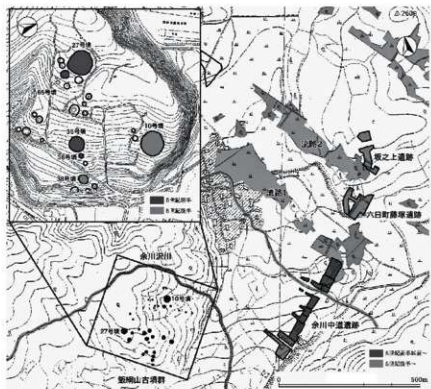
田中祐樹（新潟県庁）

はじめに

近年、新潟県では国道17号六日町バイパス建設等に伴う発掘調査（以下、六日町バイパス関連調査）によって、複数の遺跡から相次いで土器集積遺構を検出している。本報告では、六日町バイパス関連調査の成果を中心に新潟県域における土器集積遺構の概要について述べる。なお、本報告における土器集積遺構の認定は、複数の土器が一定ヶ所に集積された状況を土器集積遺構とする、田中ほか2022での認定条件を適用した。

1. 六日町バイパス関連調査の成果について - 古墳時代 -

六日町バイパス関連調査では、洪水堆積層に埋もれた未知の遺跡が相次いで発見され、記録保存に伴う発掘調査を実施する機会が得られたことで、多くの知見を得ることができた。特に、古墳時代中～後期の集落遺跡の調査成果は、新潟県域屈指の初期群集墳である飯綱山古墳群、蟻子山古墳群が所在する南魚沼市六日町地域の古墳時代社会の景観復元に大きく寄与した（第1図）。すなわち、魚野川左岸の低丘陵に位置する飯綱山古墳群、蟻子山古墳群と古墳群を中心に同心円状に展開する集落域、祭祀域、生産域の存在が調査によって把握されつつある中で、丘陵上の古墳群の築造動向と周辺集落の消長が連動した動きをみせることが明らかになってきた（小野本2020、田中2021）。古墳群とそれに対応する集落遺跡を一体的に把握し得た新潟県域では稀有な事例といえる。



第1図 飯綱山古墳群と周辺遺跡（田中ほか2022）

2. 六日町バイパス関連調査とその周辺域で確認された土器集積遺構について

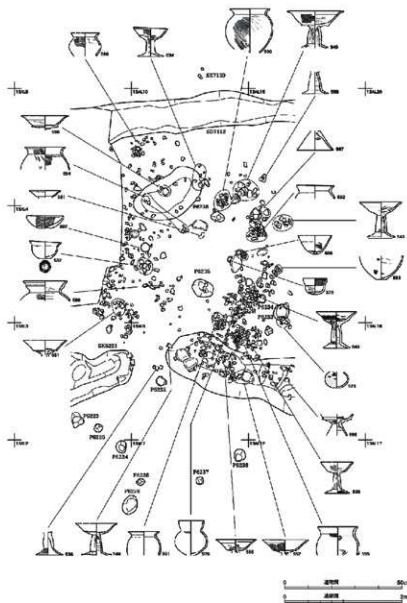
六日町バイパス関連調査及びその周辺域で確認された土器集積遺構の概要について、遺跡別に概観する。使用する時期区分は小野本敦による魚沼地域編年（小野本2020）に基づく。

南魚沼市余川中道遺跡（小野本ほか2020他）

中期前葉～後期前葉（小野本2～4期）にかけての土器集積遺構を検出している。中期前葉（2期）は、SX7111（第2図）やSX7120に代表されるように、遺跡辺縁部（E・I・J区）において土器集積遺構が認められる。器種組成は高杯、小型壺、甕が主体で、ここに小型精製器種の器台、有孔土器、杯類、ミニチュア土器等を少量含むが、須恵器は伴わない。また石製模造品、白玉は非常に少なく、鉄器や木器は伴わない。

この状況は中期後葉（3期）に大きく変化する。土器集積遺構は、遺跡辺縁部からより居住域に近いエリア（A・B区）に集中し、前段階から飛躍的に検出数が増加する。器種組成は、杯類の比率が増加し、高杯と比肩する一方、器台が消失し、小型壺が減少する。また、杯類には群馬系譜の内斜口縁杯が少量ながら含まれる。須恵器も本期には定量確認できる。さらに、木製品、石製品（勾玉、模造品、白玉等）が定量伴うようになるのが本期の特徴である。また、本期の土器集積遺構には、SX6220のように杯類を重ねる事例も散見される。このようなII期を中心にみられる遺跡辺縁部での祭祀行為を小野本教は「集落祭祀」と位置付け、一般集落の構成員による祭祀の場と解釈する一方、3期のような土器以外の祭祀具を伴うあり方を「首長祭祀」と位置付ける（小野本 2020）。後期前葉（4期）は、SX9210やSX9211など再び遺跡辺縁部で土器集積遺構が検出されるが、3期に比べて検出数は減少、集積される土器も少なくなり、土器復元率も低下する。また、石製模造品や須恵器が含まれなくなる。

SX7111 (1)



第2図 余川中道遺跡 SX7111（小野本ほか 2020）

南魚沼市六日町藤塚遺跡（田中ほか 2022 他）

中期後葉～後期前葉（小野本 3・4期）にかけての土器集積遺構を検出している。中期後葉（3期）はSX79（第3図）やSX13のように複数の土器を重ねて集積する事例が散見され、総じて復元率が高い土器が多い。器種組成は、高杯、杯、壺類、甕、ミニチュア土器で、須恵器（大甕、ハソウ等）を伴うものが多い。石製品（勾玉、白玉、模造品等）や鉄器（鍬先、刀子、鉄鏝等）が土器とともに集積される事例も散見される。後期前葉（4期）は、前期に比べて土器集積遺構の検出数は減少し、土器の復元率も低いものが大半を占める。器種組成に大きな変化はないが、杯類の構成比率が増加する一方で小型壺の比率は低下する。須恵器は少ない。被熱痕跡や使用痕跡のある土器が多く、SX44のように、被熱後に意図的に破砕、集積した事例もある。石製品や鉄器は含まれない。

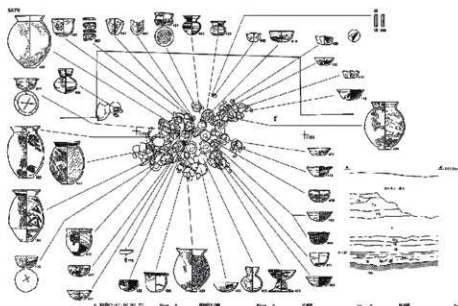
南魚沼市坂之上遺跡（田中ほか 2020 他）

中期後葉～後期前葉（小野本 3・4期）にかけての土器集積遺構を検出している。中期後葉（3期）は、SX301で多数のピット群に付随する形で土器集積遺構が検出される。器種組成は高杯、杯、壺類、甕、鉢で杯は非常に少ない。須恵器は含まないが、石製品（模造品、白玉）、鉄器（刀子）が伴う。ピット群の性格は不明だが、集積状況とピット覆土の観察からは長期間に亘る集積行為による所産と推定できる（田中 2024）。また、

自然流路であるSR38からは3～4期の土器、鍛冶関連遺物とともに石製模造品が検出されており、流路での祭祀行為が執り行われた可能性がある。

南魚沼市来清東遺跡(安立2001)

中期後葉(小野本3期)の土器集積遺構を検出している。集積行為は複数のブロックから構成される。器種組成は杯、高杯、壺類、甕に須恵器大甕が伴い、石製模造品も含まれる。



第3図 六日町藤原遺跡 SX79 (田中ほか2022)

3. 新潟県域における土器集積遺構からみた祭祀行為の変容

六日町バイパス関連調査で検出した土器集積遺構の大半は、古墳時代中期から後期前半にかけての事例である。一方で、新潟県域全体に視野を拡張すれば、土器集積行為は古墳時代前期から散見される。ここでは県域の土器集積遺構の事例を参照しつつ、新潟県域での土器集積遺構の様相を通時的に把握することで祭祀行為の具体とその変容過程について述べる。

I期：前期

新潟県域における土器集積行為は、胎内市土居下遺跡(細井ほか2006)、反貫目遺跡(寺崎ほか2004)、上越市下割遺跡(加藤ほか2024他)、糸魚川市横マクリ遺跡(渡邊ほか2008)等で確認されるように古墳時代前期から認められる。また、弥生時代後期の糸魚川市南押上遺跡(小池ほか2011)では複数の土器を地面に配する行為が確認されており、土器集積の行為自体は弥生時代まで遡る可能性が高い。前期の土器集積遺構は、基本的に土器のみを集積する。器種組成は甕、壺類、高杯、器台、鉢、有孔土器から構成され、とりわけ壺類と甕の比率が高い。また集積された土器は、被熱や明瞭な使用痕跡が認められるものが多く、意図的な破碎、散布される事例が確認される。立地の観点では、自然流路や河川の傍に形成される事例が多いのが特徴で、付近には焼土集積域や灰跡が検出される場合もあり、これらは意図的な土器への加熱、破碎、散布の一連の行為によって集積遺構が形成されたことを示す。

II期：中期前葉

II期の良好な事例は少ないが、余川中道遺跡以外では阿賀北に比較的事例が散見される。胎内市六斗葺遺跡(岡安ほか2005)では、亀甲形に並ぶ杭列の傍で土器集積遺構が検出されている。付近には流路や灰跡も検出されている点や意図的な加熱、破碎行為が散見される点はI期との共通性といえる。一方、器種組成は、I期に比べて高杯の比率が増加する傾向がある他、僅かに杯類が加わる。また、反貫目遺跡では白玉が伴うが、石製模造品は余川中道遺跡以外では確認できない。II期は、前期からの連続性と中期的な様相が併存する点に特徴がある。

III期：中期後葉

南魚沼地域を中心に土器集積遺構が確認される。器種組成ではII期では客体的だった杯の比率が増加し、高杯と比肩する一方、壺類の比率は低下する。またIII期から須恵器とミニチュア土器が新たに組成に加わる。さらに石製模造品や鉄器、木器など土器以外の器物が伴う事例が増加する。土器の意図的な破碎や加熱、散布は引き続きIII期でも認められるが、一方で、使用痕跡のない土器を重ねて集積する行為が本期から散見されるようにな

る。Ⅲ期からみられるこのような集積行為は、同時期の関東地域を中心とする全国各地の土器集積遺構で認められる特徴であり、余川中道遺跡等でみられる関東地域との新たな地域間関係が形成される過程(小野本 2020、若狭 2020)の中で取り入れられたものと推察される。

Ⅳ期：後期前葉

Ⅲ期に比べて、南魚沼地域以外の地域での土器集積遺構の事例が増加するが集積行為自体は減少傾向である。器種組成でのⅢ期からの変化としては、杯類の比率増加、ミニチュア土器、須恵器の減少が認められる。また、白玉、石製模造品、鉄器、木器といったⅢ期に土器集積遺構に伴うことが多かった器物の減少も顕著である。引き続き胎内市野付遺跡の事例のように、土器を重ねて集積する事例も散見されるものの、糸魚川市田伏山崎遺跡(佐藤ほか 2009)や六日町藤塚遺跡のように、廃棄行為との峻別が困難な事例が増加するのがⅣ期の特徴といえる。

Ⅴ期：後期後葉～終末期

Ⅴ期に該当する土器集積遺構は、現時点では7世紀初頭の土越市下割遺跡 SX8503(加藤ほか 2024)が唯一の事例である。器種組成は杯類、高杯、壺類、甕、鉢、ミニチュア土器に須恵器(杯・高杯)が伴い、白玉も含まれる。一見すると、Ⅲ期やⅣ期にみられる集積遺構の様相に近しいともいえるが、石製模造品や鉄器、木器といったⅣ期まで土器に伴っていた器物が含まれない点は、中期的なあり方からの明確な変容が看取される。現状では古墳時代的な祭祀の最終段階と位置付けておきたい。

まとめにかえて

新潟県域における土器集積遺構は前期～終末期まで認められるが、その内実は一様ではなく、徐々に変容しながら各地域で展開していく。とりわけ、Ⅱ期とⅢ期で土器の器種組成や集積行為の具体に大きな変化が認められ、その背景に関東地域からの影響が想定される。なお、本報告では紙幅の都合で取り上げなかったが、自然流路や水路内から多量の土器が出土する事例が前期～後期にわたって散見される(金田 2020)。これらは、一部にミニチュア土器、舟形木製品、石製模造品等の土器集積遺構に付随する器物を含むため、その性格について祭祀的な見方をすることが可能と思われる。今後、土器集積遺構の形成要因を考えるうえで、これら流路内出土土器の取り扱いが重要な論点になろう。また、本報告でほとんど触れることができなかった新潟県域における地域性の検討については、今後の課題としたい。

主要参考文献 ※紙幅の都合で一部割愛

- 安立聡 2001『采清東遺跡』塩沢町埋蔵文化財報告書19 塩沢町教育委員会
小野本敦 2020『余川中道遺跡の調査と諸問題』『新潟県考古学会 2020年度秋季シンポジウム・第32回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
小野本敦ほか 2020『余川中道遺跡Ⅲ』公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団第287集 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
金田拓也 2020『祭祀遺構からみた余川中道遺跡』『新潟県考古学会 2020年度秋季シンポジウム・第32回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
田中祐樹 2021『古墳からみた魚沼の姿』『魚沼地方の弥生時代から古墳時代の地域間交流 - 予稿集 -』津南学叢書第42巻 津南町教育委員会
田中祐樹 2024『南魚沼市坂之上遺跡の基礎的研究 - 現時点での総括 -』『新潟考古』第35号 新潟県考古学会
田中祐樹ほか 2022『六日町藤塚遺跡』坂之上遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第291集 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
若狭徹 2020『5世紀の東国と越後・佐渡 - 日本海沿岸の津と東国豪族の対外活動 -』『新潟県考古学会 2020年度秋季シンポジウム・第32回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会

山梨県における古墳時代中期の遺物集積祭祀 —北畑南遺跡を中心に—

熊谷晋祐（山梨県埋蔵文化財センター）

はじめに

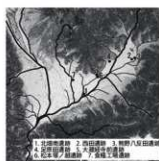
令和6年3月、筆者が令和元年度に発掘調査を担当した、山梨県笛吹市に所在する北畑南遺跡の発掘調査報告書が刊行された（熊谷編 2024）。当遺跡で特記されることとして、古墳時代中期前半の土器等を集積した遺構が挙げられる。報告書では、これを祭祀遺構と呼称したが、事実記載が主体であり十分な考察・位置づけまで進められていない。本稿では、北畑南遺跡で発見された遺物集積遺構について、その特徴を見出したうえで、県内の事例と比較検討し考察を加える。⁽¹⁾

1. 北畑南遺跡および祭祀遺構の概要

遺跡の所在する笛吹市石和町東油川は、田笛吹川流路に隣接するため、近世～近代にかけて厚い洪水砂が堆積しており、当遺跡では地表下4mに15～16世紀の遺構面、同じく4.5mに9世紀、同4.7mに古墳時代前～中期の遺構面が確認された。古墳時代前期～中期の遺構面からは、複数の竪穴建物跡が検出されている。遺構の覆土と検出面の土質がほとんど変わらず、検出に困難を極めたが、調査区内では山梨県内の古墳時代土器編年Ⅱ期（小林 2015）の建物跡を嚆矢にⅥ期まで継続する。Ⅶ期に溝が1条設けられたのちは、遺構は確認できないが、遺物包含層より中期後半～後期の遺物が出土している。よって本調査区周辺に中期後半以降の遺構が形成されていた可能性は否定できない。

遺物集積遺構は3カ所に集中しており（報告書ではユニット1～3とした）、それぞれ垂直分布も異なる。それぞれのユニットごとに出土した遺物数をまとめると、第1表のとおりとなる。

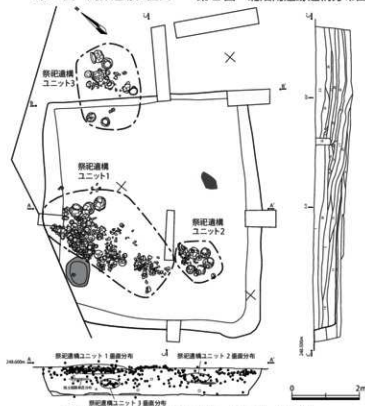
いずれも土師器が主体であり、各ユニット間に大きな型式の差異は認められない。S字甕の消失や屈折脚高坏および小型丸底壺の定型化が見られる時期であることから、古墳時代中期前葉（小林編年Ⅵ期）に比定することができる。完形で据え置かれたままの状況の土器が多く、多数の白玉の出土や土器内から鉄製品が見つまっていることなど、非日常的な場であることが可唆されることから、祭祀遺構として取り扱うものである。



第1図 関係遺跡位置図



第2図 北畑南遺跡遺構分布図



第3図 北畑南遺跡祭祀遺構 平面図・断面図

第1表 北畑南遺跡遺物集積遺構の器種構成一覧表

	高坏	小型壺	中型壺	大型壺	小型甕	大型甕	鉢	手づくね土器	鉄製品	白玉	検出面からの平均高さ
ユニット1	16	44	6	4	2	2		2	3	48	0~10
ユニット2	1		2	2		4					30~40
ユニット3	9	5	1	1	1	6	2				60~70
合計	26	49	9	7	3	12	2	2	3	48	(cm)
							土器合計	110			(点)

2. 北畑南遺跡祭祀遺構の特徴

ここでは、本遺跡における特徴についてまとめてみたい。

(1) 谷地形の縁辺部を利用

集落内の谷状の地形あるいは窪地の縁辺部で集積が行われたとみられる。検出面に水平展開するユニット1に対して、土層の落ち込みに応じてユニット3が形成されている。ただし、ユニット2については、ユニット1からユニット3へ落ち込んでいく方向と逆ベクトルであるため、土坑状の人為的な掘り込みがあった可能性も考えられる。調査区内に古墳は見つかっておらず、墓域ではなく集落内における祭祀遺構であると見込まれる。

(2) 一部に規則的な配置

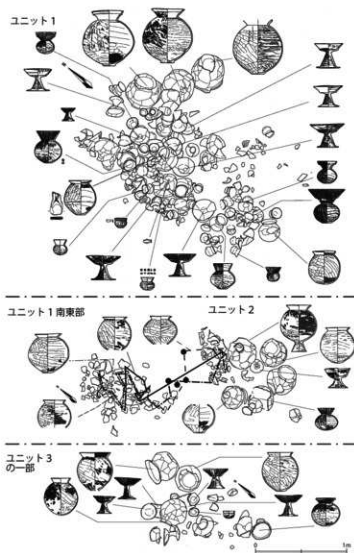
ユニット1で目をひくのが、大型の土師器壺を正位で3個体並べていることである。また、一部では高坏の上に小型の壺が乗っていたであろう状態で出土している。ユニット2では正位で置くものと逆位で置くものそれぞれが認められる。ユニット3は、甕の両側に横位の高坏を配し、それぞれの外側に正位の高坏を挟み込むように配している。また、各ユニットで使用される器種の比率は異なるが、全体で見れば小型丸底壺を多用している。

(3) 一部に破碎された土器が出土

ユニット1の一部では、甕型土器の破片が多数出土した。また、これらの破片はユニット2においても出土し、合計4個体の甕に接合・復元した。複数の破片をまとめて取り上げたため、接合関係を詳細に検討することが困難であることは悔やまれるが、故意的に破碎し、ユニット1と2のそれぞれに撒いたことも想定しうる。

(4) 手づくね土器、白玉の使用

中期後半以降の祭祀遺構の多くは、土製模造品あるいは石製模造品を多用する傾向がある。当遺跡では祭祀遺構の全ての堆積土壌に対して洗浄選別ができなかったため、白玉の点数はこの限りではないかもしれないが、手づくね土器と同様に客体的な存在といえる。白玉は、数点土器中の覆土から出土しているが、大半は集積遺構の堆積土中であり、集積後に撒かれたものと考えられる。なお、石製模造品は出土していない。



第4図 北畑南遺跡祭祀遺構 遺物出土状況

(5) 鉄製品の使用

3点の鉄製品が出土しており、内訳は刀子1点、不明鉄片1点、袋状鉄斧1点である。このうち、不明鉄片は手づくね土器内部より、袋状鉄斧は壺の内部より見つかった。いずれも偶然混入したとは考えにくく、意図的に土器内に納めたものであろう。とくに袋状鉄斧の出土した土器は、平面的に展開する土器群の上に積み重ねるように配置されている。これについては、土器を集積した最終過程において、袋状鉄斧の入った土器を配した可能性を想定している。

このほか、土壌の微細物分析を行ったところ、2点の土器内土壌から炭化イネ粃(15点と20点)が集積遺構周辺の土壌内からイシミカワと想定されるタデ属の果実4点がそれぞれ見つかっており、積極的に評価すれば、これらが土器の内容物(供物)の一つであった可能性も考えられる。

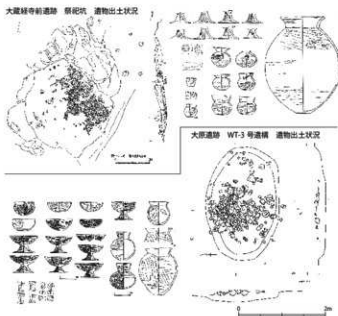


第5図 遺物集積祭祀遺構ユニット1 主な出土遺物

3. 甲府盆地の事例との比較 (第6図)

古墳時代前期の事例では、甲州市西田遺跡、熊野八反田遺跡、山梨市足原田遺跡、甲府市食糧工場遺跡が挙げられる。いずれも浅い溝、自然流路、谷地形とされる場所に、土器を多量に廃棄した痕跡をもつものである。このうち、①西田遺跡や熊野八反田遺跡は、集落に隣接する溝・流路を利用していること、②熊野八反田遺跡や食糧工場遺跡では、一部に土器が埋置された可能性があることは特記される。ただし、いずれも石製品や鉄製品を伴うものではない。

中期では笛吹市大原遺跡、大蔵経寺前遺跡の事例があり、北畑南遺跡も含めいずれも現在の笛吹市内に集中する傾向がある。大蔵経寺前遺跡は、古墳時代中期後半の竪穴建物跡4軒と、中期後半～7世紀代の古墳5基からなり、横穴式石室をもつとされる古墳(主体部は未調査)の周溝下から1辺3mの方形土坑が見つかり、多量の遺物が集積されていた。出土遺物は実測されたもので、



第6図 甲府盆地における古墳時代中期の遺物集積遺構

坏14点、高坏380点、小形埴104点、壺4点、須恵器(坏2、ハソウ1、壺口縁2)の土器類と、土製人形1点、手づくね土器304点、白玉3372点、ガラス小玉2点、土玉3点、円盤形石製品30点、剣形石製品28点、勾玉形石製品7点ほか木製品といった豊富な土製模造品・石製模造品が特徴的である。鉄製品も出土しており、小型の鉄鋸、鉄片が主体で60点以上となり、わずかながら、金具や鉄鎌などの製品もある。

大原遺跡は、古墳時代中期から平安時代までの大規模集落であり、その概要が報告されている。WT-3号遺構は2.5m×1.7mの凹地を利用した遺構で、手づくね土器100点弱、土師器(坏、高坏、壺、壺等)22点、石製模造品(剣形5点、白玉49点)が出土している。手づくね土器は2個体で一つの単位として抽出できると指摘されている。大蔵経寺前遺跡、大原遺跡はいずれも

TK208 型式期頃(小林編年Ⅶ期)に相当し、北畑南遺跡より新しい時期のものとなる。

なおこのほか、笛吹市松本塚ノ越遺跡では、「土器集中区」とされた4m×3.5mの範囲に、完形率の高い

小型壺2点、高坏2点、甕6点が出土している。北畑南遺跡と同様に、土器集積を志向した遺構の可能性がある。なお、土器集中区出土遺物の年代観は北畑南遺跡の集積遺構と同時期である。

以上のように、甲府盆地の事例では、古墳時代前期より祭祀遺構と推定される遺物の出土状況が認められるものの、多くは「投棄」に近い在り方である。一方で、北畑南遺跡は i. 完形のまま集積され、ii. 白玉・手づくね土器・鉄製品を用いる点において、中期後半の2例に通じるものであり、土器型式編年から先駆事例と評価できる。

4. 考察と課題

北畑南遺跡は、沖積地の大深度下より発見されたため、遺物集積遺構の保存状態がよく、集積が完了した状態をほぼ留めていた。完形の土器の意図的な配置や、一部土器の破砕、白玉の撒布、鉄製品の意図的な土器混入といった行為が認められ、祭祀遺構と呼んで差し支えないだろう。ただし、古墳時代中期の祭祀関連遺構に伴うケースの多い、土製模造品や石製模造品は出土していない。類例は少ないものの、甲府盆地内で言えば、その後出現する大蔵経寺前遺跡や大原遺跡との間に画期が存在する。

さて、中期末の例になるものの、群馬県では、榛名山の火山灰によって遺構が覆われた金井東裏遺跡や金井下新田遺跡の発掘成果により、遺物集積遺構の形成過程が仮説・実証されつつある（原2021）。これによると、①地表面の掘り返し（白玉撒布）、②土器類の地表面押し込み、③土器の破砕行為、④土器類に土を被覆（土とともに白玉、模造品、鉄製品を入れる場合も）、⑤完了としている。④などは火山灰に覆われていたからこそ分かることでもあるが、北畑南遺跡の祭祀遺構も①、②、③を行っている。

最後に、北畑南遺跡の遺物集積祭祀で特に注目される2点に言及したい。1つ目は、ユニット1で見られた大型の壺3個体を据え置いている点である。千葉県千束台遺跡では初期須恵器の大甕が中心に据えられ、静岡県曲金C遺跡においても、土器器の大型甕・壺類が並ぶように配置されていることが確認された。山梨県の大蔵経寺前遺跡の場合でも、大型の土器器甕3個体が投棄・破壊された状態で出土している。遺物集積遺構の類例に共通してみられるものであり、遺物集積祭祀において大型の甕・壺類が重要な役割を担っていた可能性が高い。内容物等が分かる資料の出現に期待したい。

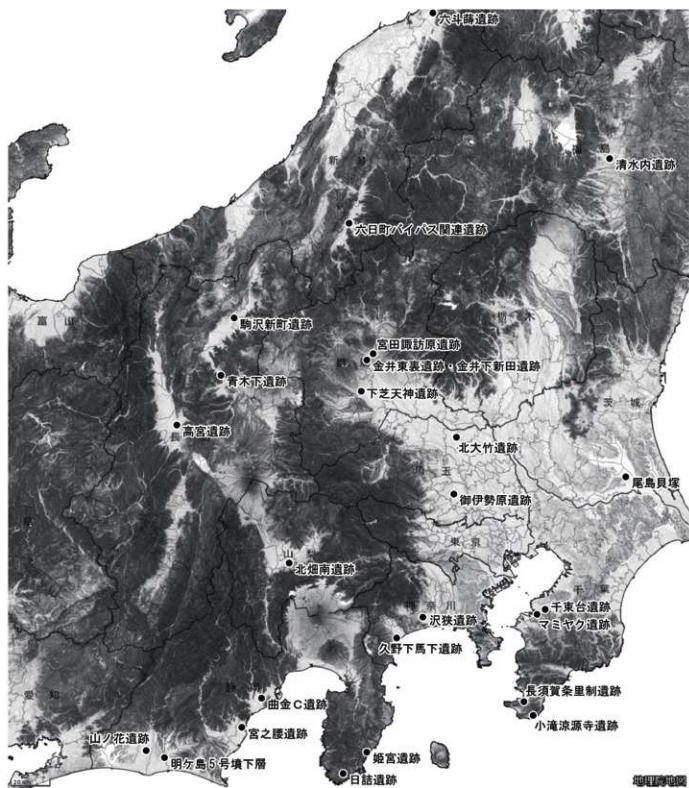
2つ目は、袋状鉄斧（の入った甕）が集積の最終段階で登場したと推測される点である。千束台遺跡では、大量の鉄製品のなかに、「斧形」鉄製模造品が数個体出土していることから、当遺跡の場合は実用品を祭具として使用する前期的な様相の名残かもしれない。これらについて、「なぜ鉄斧なのか」、「なぜ土器に納めた状態なのか」について考えていくことで、古墳時代祭祀の実態に迫ることができると思う。今後の課題として励みたい。

註

(1) 本稿は拙稿（熊谷2025刊行予定）の内容を再編集したものである。

主要参考文献

- 入江俊行 2008 「山梨県内における土製模造品について」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』山梨県考古学協会2008年度研究集会資料集 山梨県考古学協会 pp.54-68
- 熊谷晋祐編 2024 「北畑南遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第344集
- 熊谷晋祐 2025刊行予定 「古墳時代中期前半の遺物集積祭祀の新事例—山梨県北畑南遺跡の調査成果から—」『Archaeo-lio』22 東京学芸大学考古学研究室
- 小林健二 2015 「甲斐の古墳時代と土器—編年と移動を考える—」『山梨県考古学協会誌』第23号 山梨県考古学協会 pp.9-18
- 原雅信 2021 「第6章第1節4. (1) 祭祀遺構群の形成過程」『金井下新田遺跡 古墳時代以降編 分析・論考編』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第689集 pp.173-177



古墳時代中期～後期の遺物集積祭祀遺構が検出された主要遺跡分布図（関東甲信越静）

令和6年度文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」

山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム

「古墳時代中期の遺物集積祭祀を考える」

資料集

印刷日 令和7年3月5日

発行日 令和7年3月8日

編集・発行 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL055-266-3016 FAX055-266-3882

<https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

印刷 青柳印刷株式会社